HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	低地ドイツ語の動詞統語論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	覚知, 頌春
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15531号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89551
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Nobuharu_Kakuchi_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：覚知　頌春

審査委員	主査	特任教授	清水　誠
	副査	教授	野村　益寛
	副査	教授	山本　文彦

学位論文名

低地ドイツ語の動詞統語論

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では、低地ドイツ語の歴史と現状を扱った第 1 章と、低地ドイツ語で最も有力な北低地ザクセン方言の動詞形態論を概観した第 2 章が導入の役割を果たし、同方言の動詞構文を論じた第 3 章～第 5 章が中核部分を成している。第 1・2 章に関しては、申請者がロータリー財団の援助を受けて、2018 年 9 月から 2020 年 8 月にドイツ、キール大学のドイツ語学文学講座・低地ドイツ語部門に留学した成果が随所に生かされている。

第3章以下では、文法化に関する現象として、北低地ザクセン方言の doon-迂言形と疑似並列を扱っている。まず、第3章で取り上げた doon-迂言形では、同方言の複数のテキストの全用例を収集し、既存の話し言葉コーパスで補填しながら、過去半世紀の関連論文を渉猟して分析を行っている。17世紀以降の新低ドイツ語期の北低地ザクセン方言では、ゲルマン語の弱変化動詞過去形を特徴づける歯音接尾辞が徐々に失われ、かつての定動詞に見られた「強弱弱」の韻律構造の実現が不可能となり、過去形と現在形の区別も部分的に失われた。この不備を補う手段として、「語幹＋語尾」の2音節を雛形とする不定詞を伴い、すべての活用形で1音節を保つ強変化動詞 doon による迂言形が副文において合計3音節で「強弱弱」の韻律構造を再現し、doon の過去形によって過去形と現在形の区別も復元されることになった。そして、弱変化動詞から強変化動詞への類推が及んだと考えられる。また、「不定詞＋doon の過去形」は1つの音韻的語を形成し、半接尾辞の性質を有している。したがって、ゲルマン祖語で engl. do/dt. tun にあたる語形の過去形が動詞語幹へ接語化して、弱変化動詞過去形の歯音接尾辞が生じたとされるように、この場合の doon の過去形は屈折語尾への文法化への途上にあると捉えられる。以上の一連の指摘には、独自な視点から導き出された結論として十分に見るべきものがある。

続く第4章の論旨は、doon-迂言形と対応表現が北低地ザクセン方言では副文中の過去形に多用されるのに対して、調査した中部・上部ドイツ語方言では主文で頻出する事実を例証し、その要因を考察した点に集約される。前者は接続法を失い、過去形を保持し、後者は接続法を保持し、過去形を失った。doon-迂言形とその対応表現は、この語形的欠落をそれぞれ部分的に補填する役割を担っていると考えられる。低地ドイツ語と中部・上部ドイツ語で発達したこの構文の対照的な用法は、当該方言の構造的特徴の差によって生じたとする結論には説得力がある。

第 5 章で取り上げた疑似並列では、スウェーデン語とアフリカーンス語との比較から、両言語には北低地ザクセン方言よりも先行文の動詞の種類が多い理由として、次の構造的要因を挙げている。すなわち、スウェーデン語では並列接続詞 och [ɔ] が同じ発音の補文標

識 att [ɔ] との類推で補文標識に再分析され、アフリカーンス語では先行文と後続文の動詞が 1 つの複合体をなす CI (complex initial) の発達を通じて、疑似並列の文法化の進展が促されたと考えられる。一方、北低地ザクセン方言の疑似並列は文法化を経ておらず、英語の bread and butter に端的に見られるように、並列構造に内在する多義性に基づく意味的領域で成立し得る現象と考えられる。この説明は、文法化の視点に片寄らない構文化をめぐる解釈として興味深い。

以上の知見には、文法化の議論に資する点が認められる。文法化をめぐる近年の議論では、語彙項目が文法項目に移行する出発点と到達点との明確な対比が問題となることが多く、文法化の途上にあるいわば中途半端な現象に目を向けることが少なかった。本論文で取り上げたのは、そうした中途段階にあるか、もしくは構文自体が内蔵する多義性に起因すると考えられる現象の位置づけであり、通常とは異なる視点からの分析として意義がある。ただし、本論文の論旨は低地ドイツ語の枠内にとどまっており、文法化をめぐる一般言語学的考察を交えれば、内容的に厚みが増しただろうと思われる。一部の論拠には主観的な解釈が認められ、全体の構成に体系的充実の工夫が望まれるという指摘もなされた。こうした不備はあるものの、従来、日本のドイツ語研究では、現地での長期滞在を踏まえた現代低地ドイツ語の組織的研究は、ほとんどなされてこなかった。本論文はその空白を補う点で大きな意味があり、他のゲルマン諸語との広範な比較も交えている点で、近年の若手研究者としては稀に見る意欲的試みとして、高く評価できる。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の評価を踏まえ、審査委員会として全員一致して、覚知頌春氏に博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。